

## 頸損解体新書中間報告の開催

橘 祐貴

兵庫頸髄損傷者連絡会

### 1. はじめに

現在、全国頸髄損傷者連絡会と日本リハビリテーション工学協会で、頸髄損傷者の自立生活と社会参加の現状と障壁を明らかにし、自立生活と社会参加を促進する上で必要な社会的支援のあり方を検討することを目的に実態調査を行っており報告書としてまとめる予定です。去る9月19日(土)に実態調査の中間報告会を、オンライン会議システム(ZOOM)を使用して開催しました。当日は実行委員会を含めて75名の参加がありました。

### 2. 中間報告会の内容

最初に全国頸髄損傷者連絡会会長より開会のあいさつがあり、調査の趣旨説明のあと、報告会の前半では単純集計の結果について、後半では過去の調査との比較と調査で見えてきた課題について報告がありました。

過去の調査との比較では、1991年(30年前)と2010年(10年前)と今回の調査を比べて、障害サービスの制度ができたことで主な介助者が家族やボランティアから有償ヘルパーに変わってきていることなどが紹介されました。福祉用具については移乗リフト使用の増加や、通信や連絡手段としてスマートフォンの利用が増えていることがわかりました。一方で、C4以上の頸損者が増えてきていること、頸損者の平均年齢が上がってきていることもわかりました。また、受傷後に復学・復職する人が徐々に増えてきているものの、割合としてはまだ少なく、これから解決すべき課題だと感じました。

### 3. まとめ

今回の報告会は新型コロナウイルス感染予防のため、オンラインでの開催という初めての試みとなりました。運営に不安な点もありましたが、当日は大きなトラブルもなく、無事に開催することができました。終了後のアンケートでも「よかった」という感想が多くほっとしました。また、わざわざ会場に出向く必要がなかったからか、当事者の参加も多く感じました。今後も当事者が参加しやすい環境づくりが大事だと思います。これからより詳細なデータ分析を行い、来春には報告書「頸損解体新書2020」(仮題)を発行し、最終報告会を開催する予定です。

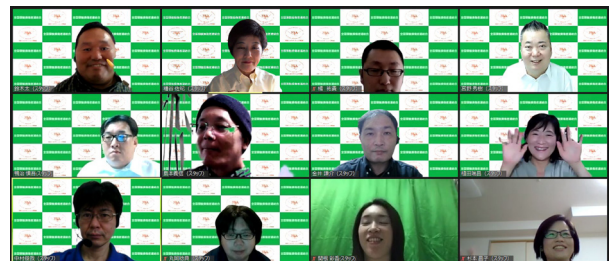


図1 中間報告会の様子

兵庫頸髄損傷者連絡会